

八神さんちの今日のご飯

世嗣

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

彼女に作ってもらって、俺が食べる。

ありふれていて、きつと何処にでもあるような話。

けれど、俺にとってはかけがいのない時間。

これはそんな『いただきます』の物語。

目次

八神さんちの《牛スネ肉のトマト煮》	1
八神さんちの《やさしいサンドイッチ》	15

## 八神さんちの《牛スネ肉のトマト煮》

突然だが俺には先輩がいる。

名前は『八神はやて』。

まだ24歳という若さながらも管理局の三佐をやっている凄いお方だ。ついでに文官としてだけでなく武官、つまり魔導師としての実力も一級品という、正にスーパーエリート。

そんな八神先輩の部下、というか一応副官をやっているのが俺。魔力もなく、仕事だって人並み程度にしかできないが、それでも周囲の助けのおかげでなんとかやっていける。

これは、そんな俺が先輩と過ごす何でもない時間の話だ。

まあ俺にとっては、得難い時間ではあったのだけれど。



「美味しい肉が食いたいです」

その言葉がどういった話の流れから出てきたのか俺は詳しくは覚えてない。けれど、確かその日は確か長引いていた仕事が一と段落して、心身ともに疲れ切った時だったはずだ。

来る日も来る日もレーションやコンビニ飯ですっかり参ってしまっと思わず呟いてしまったのだ。

「なら私が作ったるか？」

ぐでーつと情けない様子で机に突っ伏す俺に対し何で先輩がそう言ってくれたのかもまた、よく覚えていない。

けれどいかなる理由か、心優しい八神先輩は飢えた哀れな男に肉を食わせてやる気分になったらしい。

その後、噛み付くように「是非！」と答える俺の姿に、けらけらと

楽しそうに笑った先輩は「じゃあ今週末ウチにおいでやー」と言ってくれた。

その時は美味しい飯が食える！　という事でルンルンだった俺だが週末が近づいてくるにつれてふと、一つの不安が首をもたげて来た。

「俺が先輩の家にな？　それって、守護騎士の皆さんと一緒に飯を食うのか……？」

それは何とも気が休まらない話だ。俺のような小市民的な根性しかない男には少々荷が重い。

それに俺が今日食事に呼ばれたのはあの八神はやてなのだ。

才色兼備。眉目秀麗。文武両道。身長は小柄ながらも身体のメリハリははつきりしており、むしろその小柄さが庇護欲をそそる。

セミロングの茶髪はいつも艶々としており、いつも浮かべられた和かな笑みは見るものを癒し、垂れ目がちな瞳は深い海の色。

管理局の内外問わず人気が高い。それが八神はやて。

本当に何で俺はあの人と飯食うことになってるんだろう。

「……………いや、俺が呟いたからなんだけどさ」

ぶつぶつ言いながら暫く歩いて、やがて目当ての場所にたどり着いた。ミッドの郊外に佇む一軒家。大家族で住んでるだけあって、人数に見合うだけの大きさのあるちよつとした豪邸だ。

「……………よし」

『八神』と書いてある表札の前でごくりと唾を飲んだ。えいや、と勢いをつけるようにインターホンを押し込むと軽快な音が響いて扉越しに「はい」という女性の声が帰って来た。

いつも通りの聞きなれたその声なのに、俺の心臓の鼓動が軽く加速して、背中に汗がじとりとにじむ。

「いらっしやい、よう来たなあ」

扉から姿を見せた先輩の姿に胸が跳ねた。

ブラウンのエプロンに隠された白色のタートルネックのセーターに膝下までを覆う鉄壁のロングスカート。いつもは肩口あたりに流してある茶髪を今は一つに結んでいる姿はいつもに増してぐん、と大

人っぽくて色っぽい。

「こ、こここ、今日はお日柄もよく八神先輩に致しましては、御壮健そうで何より!」

「……………何いうてるんや? ガチガチになってるで」

「そ、その、なんか緊張してしまつて」

「ご飯食べに来ただけなのに、なんやおもろいなあ」

思わず意味のわからん事を口走って敬礼してしまつた。でも先輩が楽しそうだし、まあ良いのだろうか?

「しつかし、そんな風にあからさまに緊張しとる君は初めてやで」

「そう、でしょうか?」

「うん。いっつもやたらと難しい顔しとるもん。密かに私のこと嫌いなんやないかと疑つとつたとこや」

「ま、まさか! 俺が先輩の事を嫌いなんてことは…………!」

「おお、情熱的な告白。君はこんな往来で何を口走るつもりなんかなあ」

あ、こいつ俺をからかつてやがる。

身を抱いて目配せする先輩の姿に肩を落とす。顔に張り付いた笑顔は上官と服芸をやる時のもの。

随分と人をからかうのを楽しんでいらつしやるようである。

「先輩」

「ん、堪忍な。君の反応がおもろくてなあ」

「…………めちやくちや嬉しくねえ」

「まあまあ。いつまでも玄関前におつてもしやあないし、中入らへん?」

「八割方先輩のせいですけどね」

ころころと口を手で押さえて笑う先輩を見てようやく俺の体から力が抜けた。最初こそいっつもと違う先輩の雰囲気は飲まれかけたが、いざ話してみればなんてことは無い、いっつもと変わらない八神はやてだ。

変にかしこまる必要はないか。

半身を乗り出した先輩が生つ白い腕で開いている扉に軽い会釈を

してから身体を滑り込ませる。すると、ふわりと漂う先輩からの爽やかな香りに頭がくらくらしそうになった。

ああ、なんで女の人はこんなにもやたらといい匂いがするのだろうか。

緩みそうになる表情を引き締めると、靴を脱いでリビングへ向かう先輩の後を追う。

ぱたぱたとスリッパを鳴らす先輩に続いて廊下を歩き、リビングに入ると家族である守護騎士の皆さんが……あれいない？

俺が不思議そうにきよろきよろと周囲を見渡していると先輩がああ、と声も漏らした。

「みんななら居らへんよ。出張とか道場の合宿とか被つてもうてなあ」

「ラインさんですか？ それは凄い偶然ですね」

「ん、いやあの子とシヤマルは気を利かせて……まあその話はええやろ。ほら、いつまでも立つとらんでそこらに好きに座り」

「はあ」

促されるままに食卓の先輩の引いた椅子に座る。

「なんか飲む？ 緑茶、紅茶、コーヒー、青汁、ジュース、お酒と飲むものは一通りあるけど」

「ならコーヒーをお願いしていいですか？」

「お酒やなくていいん？ 君好きやったやろ？」

「まあ確かに好きですが、流石に上官の家で酔っ払ったりしたら事ですし」

「なるほど、自分が狼さんになってしまるのが怖い、と」

「そんなこと言ってますんよ！ というか なりませんし！」

「なんや、私には襲う価値も無いっちゅうんか？」

「先輩」

「あはは、ごめんごめん。コーヒーな。砂糖は一つで良かったよな」

「……………はあ、はい。それでお願いします」

しなを作った先輩をじとつと睨むが、当の本人はそんなもの何処吹く風で、軽く笑って流してしまふ。

くそう、この人と話すと、どうしても一枚上手に行かれる、というか、どうしてもからかわれる側に回ってしまう。

腹の黒さとか経験とか、後はオツムの出来とか色々かなわないのだ、俺と先輩では。

そんなことを考えていると、俺の目の前にソーサーに乗せられたカップが置かれた。

仄かな湯気が立ち上る器の中には地獄の底から直接組み上げてきたかのような黒々とした液体が満たされている。

「ほい」

「ありがとうございます。えっと、砂糖は……」

「もう入れてあるでー」

「それはお手数かけました」

「こんくらい手間のうちにも入らへんって」

先輩は問題なし、とでも言うように手を振ると、「じゃあそれでも飲んでゆっくり待って」と言ってお台所へと向かった。

向けられた背中、ひらりひらりと、エプロンの結び目が蝶々のように踊る。足がパタパタと忙しく動くと、意地でも素足は見せん、とでも言うかのような長いスカートがはためいて、ほんの一瞬だけ先輩の脚のラインを浮かび上がらせる。

とくん、と小さく胸が跳ねた。

普段の先輩は管理局の制服であるタイトなスカートが多い。だから正直言って先輩の脚のラインなんぞ珍しいものでは無い。

けれど、ああやって隠されてしまうと、一瞬輪郭が見えるだけでも、普段見れないものを覗き見ているような、そんな感じのなんだかいけないことをしているようで、少し落ち着かない。

思わずそのまま先輩を注視しそうになるがなんとか視線を手元のコーヒーカーップに落とす。

そこには今までの人生の間付き合ってきた非常に親しみのある顔の男が、そこはかとなく浮ついた表情を浮かべているのが、黒々とした鏡面に映し出されていた。

いかん。俺は飯を食いにきたのだ。決して八神先輩の御御足を見



にきたわけでは無い。

カップを両手で持ち上げると器の表面の鏡がたわんで、ぐんにやりと浮ついた男の顔を歪めてくれた。

「ふー」

けれどそれでもまだ満足できなかったので、湯気越しのそいつの顔に息を吹きかけてやる。

肺から吐き出された呼気が辺りを漂っていた薄白い熱気を吹き飛ばして、瞬きほどの間水面に小さな穴を穿ち、波紋を拡がらせた。

波紋は穴から同心円状に広がっていきコーヒーカップの縁にぶつかると軽く壁をせり上がって、そして勢いを殺せないまま鏡面へと潜り込んで行く。

とぷん、と響く微かな音。

そこまでやって漸く俺はカップに口をつけたが、元来猫舌の俺はそれでも舌が痺れる様に熱く感じた。けれど、そんな事はおくびにも出さず先輩の淹れた熱いコーヒーを流し込んだ。

途端、舌尖からすうつと鼻腔へと香ばしい芳香が通り抜けて、その後広がる苦さは砂糖一個分マイルドで。

「ふう」

小さく息を吐いて、今座っている食卓を見渡してみる。

軽く十人くらいは座れそうな大きな木のテーブル。いつもはここで先輩と、守護騎士の皆さんと、融合機のお二人と、大所帯の食事をしているのだろう。

けれど、今日ここで食事をするのは俺と先輩の二人らしい。

なんだか、変な気分だ。

座りが悪くて思わずトイレにでも行こうかと思ったのと、ふわりと俺の鼻腔をトマトの酸味のある香りがくすぐったのはほとんど同時だった。

「ん、できたな」

聞こえた小さな呟きに、動きが止まる。俺の余計な考えなど知らんとはかりに、その香りは一瞬で俺の思考に滑り込んで、まだ静かにしていた『食欲』という欲望を強かに殴りつけた。

「できたでー。待たせて悪かったなあ。お腹へった?」

「いえ、別にそこまで——」

減ってません、と続けようとした俺の言葉をぐう、という腹に住んでいる虫が邪魔をした。

「ふふ、随分と正直な子飼つとるんやな、君は」

「ぐっ」

先輩にくすくすと笑われて、頬が熱くなる。

ああもう、なんで俺の体はほんの少しの強がりも気遣いもさせてくれないほど正直なのか。

今は自分のことが恨めしくて仕方ない。

「ほな君も待ちきれへんようやし、そろそろ食べようかー。そこにあるコースター置いてくれへん?」

「コースター、というと鍋とかを乗せるアレですか」

「そそ。そこのキッチンの端のところ、なんか置いてあるやろ、それや」

「あ、これですか。えっと、ここら辺でいいですかね?」

「んー、いやもうちよい右……うん、そこら辺」

先輩に言われたあたりにコースターを置くと、キッチンからえっちらおっちら運ばれてきた大きな鍋がどしん、と置かれた。

そして、ぶわりとトマトと強い肉の香りが辺りへと漂った。

目の前に鎮座した鍋に視線が釘付けになる。

もうもうと湯気をたてる鍋には赤茶色のスープ、そしてごろごろと一口大にカットされた肉が所狭しと入っている。

自らを強く主張するように立ち上る香りはそれだけで俺の空腹感を加速させ、いつそ魔法でも使つてると言われた方が納得しそうなほどの食欲を俺から生み出していく。

「こ、これは」

「ん? 　んー、普段は料理に名前なんてつけへんけど、そやなあ……」

目を丸くして鍋を見つめる俺の言葉に律儀に答えようとする先輩。その手の中にはこんがり焼き目をつけた、薄切りのたバゲットの

乗った皿があった。

『牛スネ肉のトマト煮込み』とか、そんなところだろうか」

先輩はあらかじめ持ってきていた深めの小皿に鍋の中身のトマト煮の肉をたっぷりとつぐと、数枚のバゲットが乗った皿と一緒に俺に渡してくれる。

「あ、『くシエフの愛情を添えてく』とかつけようか？」

「謹んでお断りさせていただきます」

「なんやつまらへんなあ」

ぶー、と先輩は唇を尖らせると鍋を挟んで対面にすわった。

「じゃあ、食べようか」

「はい」

食卓の向こう側に座る先輩に軽く頷いて見せると自然と手を合わせる。

「いただきます」

「めしあがれ」

目を閉じて作ってくれた先輩と、料理になってくれた食材たちに感謝の念を込めて祈る。

『いただきます』というこの文化は先輩の出身世界である『地球』の『日本』というところのものなのだ、八神はやたと知り合ったばかりの頃に教えてもらった。

俺たち人間は何かを食べずには生きていられない。それは則ち、人間以外の命を奪って自らに取り込むということだ。

故に『貴方の命をいただきます』、と感謝の念を込めて祈るらしい。それはミッドチルダにはない文化で、俺はこの『いただきます』という言葉が結構気に入っていた。

食べ物を食べる、という当たり前に感謝ができるというのは、なんだかとてもいいことだと思う。

それに、今気づいたが、先輩の『めしあがれ』というのもいい。俺のために作ってくれたんだという気持ちをひしひしと感じる。

先輩の緩い笑みに見つめられながら手を解いてスプーンを手にとった。

「じゃあ、まずはトマト煮だけで」

木のスプーンで小皿からゴロゴロと入っていた一口大の肉塊をスープと一緒にすくった。

「おお、凄え」

たったそれだけでたつぷりと煮込まれたスネ肉はふるふると震えて、降り注ぐ電灯の光を反射してキラキラと光る。

トマトの甘酸っぱい匂いに混じって、香ばしく焼かれた肉の香りが、口の中の唾液を溢れさせる。

無意識にごくりと唾を飲んで、本能の赴くままにかぶりついた。

「――！」

それは、価値観を根底からひっくり返されるような衝撃だった。

最初に感じたのはスープの味だった。トマトの酸味、けれどトマトだけが主張している訳ではなく、野菜スープと言われても納得するような濃厚さ。もしかすれば他の野菜もいくつか入っているのかもしれない。

そして、スープを味合うのから、間髪置かずに、口の中で肉がほろりと崩れた。

こういう煮込まれた肉というのはどろどろに煮崩れしていたり、硬かったりする場合がある。

けれど、これは違う。

しっかりと形を保ちながらも、歯で軽く噛めばほろりと崩れて中から肉汁を溢れさせる。『肉を食いたい』という俺の望みに答えるように肉を噛むという工程をさせながらも、同時に肉の柔らかさを堪能させる。

肉が噛めるほどしっかりと形を保っているのに、押せば崩れるほど柔らかい、という矛盾を実現していた。

じゅわりと溢れる肉汁。舌触りも優しく、尚且つトマトと味を潰し合うことなく引き立て合っている。

「――めちゃくちゃ美味しい」

それ以上の言葉は野暮。そう感じた。

はぐはぐと一心不乱に手を動かし頬張って咀嚼、口いっぱい幸せ

を取り込んで、あつという間に皿の中身を空にした。

「おー、いい食べっぷりやな」

肘をつけて組んだ上に顎を乗せて先輩が俺の方を見て満足そうに頬を緩めた。

俺は一気呵成に目の前の料理を食べ終わると、今胸に満ちている思いをすぐさま彼女へと伝えなければ、という使命感を感じた。

「先輩ー　めちやくちや美味いですー！」

「そう言ってくれると冥利に尽きるわ。おかわりいる？」

「いりますー！」

食いつくように答えると「なんや犬みたいやな」と先輩が笑って深皿にまた肉とスープをついでに渡してくれる。

何やら失礼な事を言われたような気もするがそんな事気にもならない。それ程に、いま俺は食欲を満たす事に囚われていた。

悪魔的……！　悪魔的な美味さ……！　こんな料理を作れる

先輩は地獄に住むという悪魔かなんかなのではと疑ってしまう程だ。

「めちやくちや美味いです」

「さつきから君それしか言わへんな」

「だってめちやくちや美味いですもん」

「まあそういうシンプルなやつが一番嬉しいんやけどな？」

「これ店とかで出てたらリピーターになるレベルです。凄い美味しい」

「ふふ、せやろか。あ、さつきバゲット渡したやろ。アレに肉載せてみるとええと思うよ」

「……！　そんな罪深いことしていいんですか」

「ええんよ。それをやるために用意したんやし」

先輩に言われて恐る恐る皿に乗せてある薄切りされたバゲットの一つを手を取った。

うつすらと焼き目をつけられた表面は黄金色に光っていて、漂う香りからバターが薄く塗ってあったのだということがわかる。

少しのスープと肉をスプーンで掬って慎重に乗せると、少し赤みを帯びた茶色のスープが黄金のバゲットに染み込んだ。

目の前の宝石のような肉と、秋の小麦畑を思わせるバゲットとは、まるで芸術品のようで、見ているだけで何かが満たされていくようでもある。

「はーぐっ——」

だがこれは食べ物なのだ。いつまでも見つめているという選択肢は俺には無かった。肉の乗ったバゲットに思いつきりかぶりついて、ざくつという小気味いい音が聞こえた。

「こ、これは……………！」

「ん？」

「先輩！」

「なに？」

「めちやくちや美味しいです！」

バゲットはあらかじめバターが薄く塗ってあるおかげでそれだけでも香ばしい。けれど、それに肉と野菜の旨味が濃縮されたスープが染みているせいで、旨味の暴力とも言えるものへと進化している。

また咀嚼するのにほとんど力を使っていなかったトマト煮に対し、バゲットはあらかじめ焼いているため、ざくざくとした食感は食べていても、その音を聞いていても心地いい。

「はぐ。先輩これどうやって作ったんですか？　めちやくちや美味しい」

「んー、そんな難しくあらへんで？　まず野菜を小さく切る。今回使ったのは人参と玉ねぎと、ああ、セロリも安かったから入れたなあ。それで同じく一口大に切ったスネ肉を入れて、赤ワインでコトコト煮込むんよ。二時間か、三時間くらい？　所謂マリネって奴か？」

「ふむふむ、はぐはぐ」

「あ、忘れ取ったけど肉はあらかじめ焼いておく。バラ肉とかに比べてスネ肉は筋が多いから煮崩れしにくいけど、あらかじめ塩コショウとかで焼いとくとぐつと形がしっかりするんよ」

「はむっ、ふむ、はむ」

「んで、他にはトマト缶入れたり、肉柔らかくするために蜂蜜つこうたりしてなー」。

でも今回はちよつとトマトの味が強かったからデミグラスソースを入れてみてんやけど、結構美味しくできたと思うな」

「はむはむ、はぐはぐ」

「……………君さつきから凄い勢いで食べとるけど、私の言ったことわかったんか？」

「すいません！　目の前の肉が美味すぎてなにも頭に入ってきてませんでした！　俺が聞いたのにすみません！　美味しい！」

「……………まあええわ。美味しく食べてくれるならそれが何よりの報酬やし」

ほう、と呆れたように息をつく先輩を傍目に俺はガツガツとひたすらに口を動かす。

あ、セロリだ。なるほど、やつぱり野菜他にも入ってたな。

「君は本当に美味しそうに食べてくれるなあ」

「へ？」

突然先輩がそんなことを言ってきたもんだから、俺は思わず首を傾げてしまう。

「突然どうしたんです？」

「別に突然やあらへんよ。前からそう思ってた」

「はあ」

先輩がふ、と一瞬目を伏せて縛っていた髪をゆるりと解いた。きめ細やかな茶髪が揺れて肩口あたりにかかる。さつきまで結んでいたせいか、ふんわりとウェーブがかかっているようにも見える。

「前から私のご飯食べさせてあげたいなーって思うとったんよ」

「——え」

「実際に言うと、なんや恥ずかしいな」

「そ、そうなんですかあ」

八神はやてが顔を上げて舌を出した。けれどその頬はほんのりと薄紅の色へと変わっている。

何を言えばいいかわからない。

八神はやてにこんなこと突然言われて、俺はどうすればいいのだろうか。

はっ、そう言えば昔親父が困ったら女は褒めとけって言ってたな。よし、ここはひとまず当たり前障りのないことを褒めとけ！

「え、ええと、その、料理！ 先輩料理美味いですね！ きつとい  
いお嫁さんになれますね！」

「それロツサ達にも言われたわ。やっぱお料理上手だとお嫁さんにし  
たくなるもんやろか」

「そりやそうですよ！ 可愛いお嫁さんの手料理ってのは男の憧れ  
ですよー」

「ふーん、それは君も？」

「ま、そうですね。俺も憧れます」

あっはっは、と冗談めかして言うと、先輩が対面に座る俺へとぐ  
いと身を寄せてきた。

「じゃ、じゃあ、も、もし、仮定の話やよ」

ほう、と先輩の熱っぽい、どこか緊張したような息が俺の頬を撫で  
た。

「私が、君のお嫁さんになる、とかなったら、う、嬉しい？」

「へ、へ？」

頭が真っ白になる。

お嫁さん？ 誰が？ 誰の？

「えっと……」

八神はやてが薄紅の頬のままじっと俺を見つめる。

息が触れ合うほどの近くにある彼女の顔。深い海の色は、波打  
つようにゆらゆらと揺れているが、俺からは逸らされない。

何も言えないし、彼女も何も言わない。俺たちの間に横たわる静謐  
は、ただ、誰かが声を発さなければ失われたいし、この会話が進展す  
ることはない。

そして、今ここには俺か八神はやてしかいない。

「どう、思う？」

「俺、は……」

息が、近い。

瞳が揺れている。



俺は、どうしたいんだろう。

無意識にうちに手が八神はやての方へと伸びる。

そして、柔らかな茶髪の髪を掻き分けて薄紅色の頬に触れようとして――

「ただいまー、はやて。いや、合宿が雨で中止に――あ」

「あ」

「あ」

だが、それよりも早く家に入ってきた赤毛の少女（のように見える女性）、ヴィータさんと目があつた。

「――」

「……………」

「――」

「ふう」

にっこりとヴィータさんが笑う。

「取り敢えずあたしたちの留守中にはやてにコナかけようとしたって認識でいいよな？」

「待ったア――！」

俺飯食いに来ただけです！

ほんとそれだけですよ！

「けですー！」

「そ、そうやよヴィータ！」

ふっと気の迷いが出てきただけやから

！　その、やから、落ち着いヴィータ？」

「いやあのムードで勘違いはねえだろ！　安心してくれはやて！」

はやてに相応しいかとかん話し合ってるから。最悪アイゼンの出番だ」

「だから違うんですうー！」

俺の情けない声が八神邸の広いリビングに虚しく響いた。

『八神さんちの《牛スネ肉のトマト煮》の回』

## 八神さんちの《やさしいサンドイッチ》

芝生の上に引いたビニールシートの上で八神先輩と並んで座って、遠くで遊んでいる子ども達を見守る。

「ええ天気やなあ」

「ですなあ」

ある休日の昼下がり、俺は八神先輩の誘いを受けて少し遠出をしてピクニックへと訪れていた。

吸い込む空気はどこまで透き通るようで、先輩の瞳とよく似た色合い空は普段の悩みなどどうでもよくなるほどに爽やかだ。

「にしても、今日俺がきても良かったんです？ 八神道場の子達の労いも兼ねたモンだったでしょう」

「んー、まあ他の親御さんもぽつぽつおるゆるいやつやし、みんなも君にはなついとるしええんちゃう？」

「ゆるゆるつすねー」

「まあ八神道場<sup>チ</sup>は他のガチなこと違って道楽<sup>チ</sup>みたいなもんやからなあ」

「道楽つすか」

「みんなが楽しく魔法と関わりながら、身体と心を鍛えられたら素敵やなあと思うわけです、私は」

ま、道楽だからと言って手を抜いとる訳やあらへんけど、と先輩が続ける。

流石若干24歳でそんな事まで言えるのだからまったく大したもんだよ、先輩は。

管理局の仕事だけでヒイヒイ言ってる自分が情けなくなるね。ちらり、と先輩の横顔を盗み見る。

ふんわりとした白い清潔感のあるブラウスに、すらりとした御御足を際立たせるぴっちりとしたデニム。今日はピクニックで体を動かすせいだろうか。

日差しを遮るつば広の帽子——俺のなけなしの知識に間違いがな

ければストローハットというやつ——が落とし影の下にある瞳は、軽い変装のつもりか黒縁のメガネで彩られている。

天下の『八神はやて』だ。軽い変装くらいはするのが普通だろう。うーむ、まったく本当に綺麗というか、なんというか、眼福。

「ん、なんや私の顔じいっと見つめて」

「いや、こう、デニムは新鮮だな、と」

「ん、そうか?」

「はい、制服はスカートですし、この前お邪魔した時もスカートでしたから」

まあ正確にはこの前はロングスカートだったんだけど、こうして脚のラインが見える服は珍しいと思う。

「君はスカートの私の方がいい?」

「あ、いえ別にそういう訳では。俺はパンツルックの先輩もめちゃくちゃ素敵だと思えますよ」

「ふふ、ストレートな褒め言葉、私も照れるわ」

「とiiiiつつ、八神はやては幼気な後輩をからかうのであったまる」

「バレた?」

「もう二年の付き合いです。慣れもします」

「そりやちよつと残念」

シートに横座りした先輩が口元を抑えてくすくす笑う。

心から楽しそうで、なんだかこちらまで嬉しくなる。

先輩はしばらく小さく笑っていたが、ふと、表情を柔らかいものへと変えて、ずりと距離を少しだけ詰めてくる。

「それでも私、結構嬉しかったんで? 胸もドキドキしたし」

「ま、またまたご冗談を」

ほう、と先輩の息が耳にかかる。

「なら触って確かめてみる?」

ぽよん、とブラウスに覆われた胸を先輩が腕を組んで強調する。

え? 触る? 誰が? 俺が? 誰のを? 先輩のを?

たっぷり十秒使って言葉の意味を理解する。

「まじすか?!」

「じよーだん」

添えられたのはとびきりの笑顔。

デスヨネー。

こいつ恋人のいない俺の純情を……。

「男の人ってほんとそーいうの好きやなあ」

「女性の胸が嫌いな男なんていませんよ」

がつくしと項垂れる俺の肩をぽんぽんと先輩が叩く。

「嬉しかったのはほんとや。このまま好感度を上げていけば……」

「ワンチャン？」

「まあそれは君の勇氣次第やな」

「俺の不屈レイジングハートの心が試されますね」

「変な使い方をしたらなのはちゃんに怒られるで」

まあそんな下らない話（先輩にからかわれていたともいう）をして  
いると、遠くの方でザフィーラさんの号令で子ども達が解散して各々  
の親の元へと向かっていく。

「ん、そろそろお昼やな」

「えーと、今日親御さんが来れてないのは、ミウラちゃんでしたっけ」

「せやな。だからお昼は私たちとやな」

なら昼ご飯はミウラちゃんとザフィーラさん、俺と先輩の四人か。  
ヴィータさんは今日はいない。何でも仕事が忙しかったのだとか。  
俺としては俺の方がトマト煮されそうになった件があるので助かっ  
たとも言える。

「はやてさーん！」

「主、ただいま戻りました」

そうこうしているとミウラちゃんが弾けんばかりの笑顔でこちらに  
走ってきた。隣には人型から狼のモードへと変わったザフィーラさ  
ん。

「ザフィーラお疲れ様。ミウラ楽しかったか？」

「はいとても！」

「そりや良かったなあ。ん、顔が汚れとる、なあ、ミウラの顔拭いたげ  
たって」

「あ、俺っすか？」

「うん君」

八神先輩がよいしょ、と脇に置いてあったバスケットをピクニックシートに置く傍ら、俺はバックを漁る。

「えーと、ウエットシート、ウエットシート……」

「あ、ちやうちやう、そこやなくて外のポケットの方」

「あつた、これか。えーと、あれ？」

「あーもう不器用やなあ……」

「す、すみません」

仕方ないなあと八神先輩が俺からウエットシートを受け取るとミウラちゃんの汚れた顔をこしこしと拭いてあげる。

そして、しばらくなされるがままだったミウラちゃんが、じつと先輩と俺を見て、太陽のように朗らかに口を開いた。

「はやてさんとお兄さんってなんだかウチのお父さんとお母さんみたいですねー！」

「おとっ」

「ミ、ミウラ？」

「ボクのお父さんたちもこんな風に仲よさそうに話してるんです！」

「そ、そそそ、そっかあ」

ちらり、と八神先輩が俺に視線を向ける。

ミウラちゃんの不意打ち気味の言葉のせいか、頬が桜色に染まっている。

「お、お父さんたちやって」

「な、なんというか仲よさそうに見えたなら、こ、光栄ですね」

「せ、せやな！ と、取り敢えず、ごはん！ ごはん食べよか！」

「ですね！ ミウラちゃんもお腹減ってるでしょうし！」

「あ、はい！ ごはん、食べたいです！」

「よーしごはんや！ ごはん！」

半ば勢いで押し切るように昼ご飯へ。因みにザフィーラさんはそんな俺たちを呆れたように見ていた。

八神先輩がシートの中央に置いたバスケットをぱかり、と開くと、

俺とミウラちゃんが揃って首を傾げた。

「新聞紙?」

「いえ、これはアルミホイルだと。お母さんがお店で使ってるの見たことあります」

「そーいやミウラの家はレストランやもんな」

なるほど、確かによく見れば質感はアルミホイルだ。外側に文字が書いてあるやつらしい。随分とオシャレなものもあったものだ。

「それで先輩今日はこれをどのようにな?」

まさか匠の腕にかかればアルミホイルが食べられるようになるわけでもあるまい。

首を傾げる俺たちに先輩はくいつと眼鏡を押し上げて不敵に笑んだ。

「ま、みてるとええよ」

先輩がバスケットの中にあつたプラスチック製のまな板と包丁を取り出すと、バスケットの中の四角形のアルミホイルにザクザクと包丁を入れていく。

すると、白と色鮮やかな断面がアルミホイルに包まれた中から見えた。

これは……、アレか。

「サンドイッチ?」

「せーかい」

ミウラの言葉に先輩がにっこりと笑って頷いた。

「ま、やっぱピクニックにはサンドイッチって相場が決まってるからな」

先輩がひとしきり包丁を入れ終わるとそう言ったが、よく頭に入つてこなかった。

真っ白なパンにトマトの赤とキャベツの緑、チーズの黄、ハムの桃色に彩られた、ザ王道のサンドイッチ。

ありふれたもののはずなのにどうしても目が離せない。

「ごくり、と生唾を飲み込む。」

「と、そこのおにーさんが辛抱たまらんみたいやし、さくつと食べよ

か」

「む、申し訳ない」

ぱん、と三人で手を合わせる。

「いただきます」

「はあ、めしあがれ」

ミウラちゃんも俺も言う文化はないが、この「いただきます」って文化は嫌いじゃない。

「じゃあ取り敢えず俺はこいつを」

合わせていた手をとくとハムと野菜のサンドイッチを手に取ると、アルミホイルをむいた。

「おお、すげ……」

パンはしつとりとして柔らかく、それでいてトマトなどの汁でベタついてもいない。

見た目も鮮やかでみていて楽しく、ここからでも僅かに香るのはマヨネーズとマスタードか。

「はむっ」

それ以上我慢できずにサンドイッチに齧り付くと、しゃつきりと音が鳴った。

「ん——」

目を見開く。野菜が一口で容易く噛み切れるほどみずみずしい。ハムとチーズも後味がしつこくないし、野菜のしゃきしゃきとした歯ごたえが食べていて楽しい。

味付けも素材を味を引き立てるマヨネーズとマスタードがよく映えている。

「美味しい！先輩めちゃくちゃ美味しいですよ！」

「はやてさん、とつても美味しいです！」

「ん、そか。なら良かったわ」

「いや、ホント美味しいですよ！ね、ミウラちゃん！」

「はい！これウチのお店で出してもおかしくないレベルですよ！」

もむもむと頬つぺたをリスのように膨らませてミウラちゃんがサンドイッチを頬張る。

「ザファイラさんも、そこで寡黙にドックフード食ってる場合じゃありませんって！」

「いや、俺は……」

「みんなで食べた方が美味しいですって！」

これは犬つころになつてる場合じゃねえぜ！

ザファイラさんが人間形態になると俺に言われるまま一口サンドイッチを頬張ると、ふ、と鉄のような表情筋が、柔らかくなる。

「やはり主の料理は美味だ」

「おーきに、ザファイラ」

よし、みんなで食事をする任務コンプリート！ 俺は次のサンドイッチを食べさせてもらうぞ。

今度は実はさつきから気になつてた薄いパンの間にぎつしりとはさんであるカツサンドを手にとつた。

「これは、凄いつすね……」

「あ、それ？ 君とかザファイラとかは食いでがあつた方が良くかなーって」

「神……」

「泣いてる?!」

先ほどのハムサンドは具材とパンは良いバランスを保っていたが、このカツサンドは違う。

肉を食べ！ と言わんばかりにドデンとカツが鎮座している。見るだけでも腹を満たしてくれそうだ。

「はーぐっ」

ザクつと軽い音とともに衣、そして肉を噛み切ると、じゅわりと中から肉の旨みが溢れる。

「美味い！ これ、アレですかね、とんかつソースと……」

「マスタートードやな。けっこうええ味出してるやろ」

「最高です！ いや、ホント美味え！」

先輩に感謝の気持ちも兼ねてどこが美味いかを正確に伝えたい気持ちもあるが、言葉を重ねれば重ねるだけ陳腐になつてしまう気がして、結局「美味い」の一言に落ち着いてしまう。



でも、先輩が嬉しそうに笑ってくれるし、多分これでいいのだろう。四人で食べるとバスケットいっぱいサンドイッチもあつという間になくなってしまう。

「ごちそうさまでした」

四人で声を揃えて食事を終える。

「ぷはー、食った食ったー」

「美味しかったです」

「大変美味でした、主」

「あはは、喜んでもらえてこつちも冥利につきるわ」

「ごろん、と芝生の上に寝転がると頬を緑の匂いの風が撫でた。

「美味しかった？」

「めちやくちや。是非また作って欲しいくらい」

「君が頼むんなら、いくらでも」

先輩が寝転んでいる俺を覗き込んで、ふうわりと優しく俺の頭を撫でた。眼鏡の向こうの先輩の目は海の青、空の青を思わせるようにひどく綺麗で、つい見惚れてしまう。

「どないしたん？」

「……あ、いえ、その、ちょっと綺麗だなー、とか思ってた」

八神先輩は一瞬あっけに取られたように瞠目して、すぐに花咲くように顔を綻ばせた。

「ありがとう」

……訂正、先輩の目は空と同じくらい綺麗だけど、笑顔はその何倍も素敵だわ。

『八神さんちの《やさしいサンドイッチ》の回』